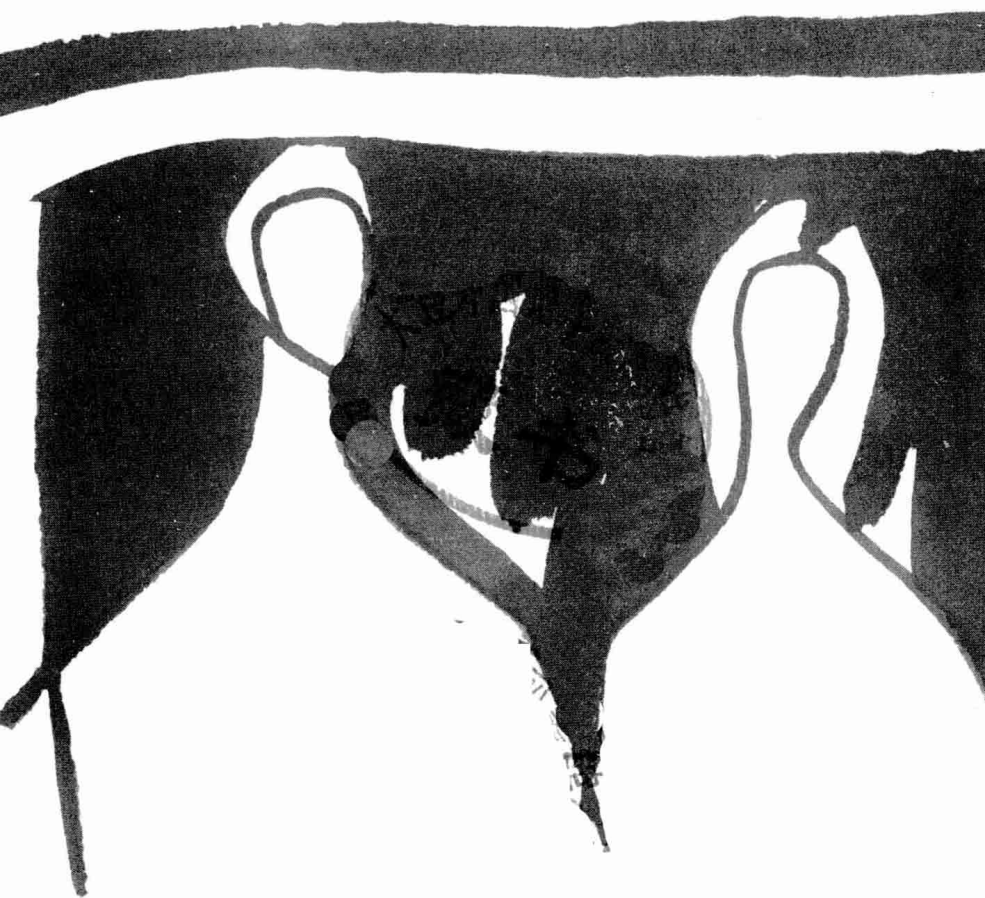


過ぎし楽しい年

阿部 昭



阿部 昭



過ぎし^す樂^{たの}しき^{とし}年

昭和五十三年三月十日印刷
昭和五十三年三月十五日発行

著者 阿部^{あべ}昭^{あきら}

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

振替東京四一八〇八

印刷 二光印刷株式会社

製本 神田加藤製本

定価 九八〇円



© Akira Abe 1978 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

過ぎし楽しい年

「『幽霊屋敷』を探検してみようよ」

家を出るなり、小学生の息子の一人が言った。

「そうだな、行ってみるか」

ほくもそんな気分になった。

天気の良い日に、一度、散歩がてら、『幽霊屋敷』をしらべてみようというのは、しばらく前から子供たちとの約束だった。

その空き家は、ほくの家のおすぐ近くの千坪ぐらいの松林の奥にあるのだ。荒れほうだいの松林で、見たところどここの誰の所有とも見当がつかなかった。ところどころに玉石の低い石垣が残っているだけで、柵のようなものはとくになくなっていた。敷地の東の端に、やはり玉石で固めた太い門柱が二本立っていたが、扉はなかった。

中はどうなっているのか？

ぎっしり生えた海辺の松が太陽をさえぎり、昼でも暗く、不気味だった。その隙間は雑多な

灌木がからまり合つて塞いでいた。犬猫のほかには入って行く者もなさそうで、ときどき附近の住人が、もてあました塵芥やガラクタを道ばたの草むらに投げこんで行くらしかった。

しかし、いまでこそ珍しいそんな空き家も、昔はこの辺にいくらかもあったのだ。昔というのは、戦争が終るまでの話だが。

湘南の海辺の家屋の何分の一かは、そうした空き家だった。真夏のほんの何日間だけ、東京から持主がやつてきて風を通す。あとは、秋も、冬も、春も、ずっと雨戸がしまっている。なかには空き家と見えて、何をするでもない金持の老夫婦がひっそりと暮していたり、長わづらいの病人が家政婦つきで静養したりしている屋敷もあった。

空き家は、専門の泥棒を別にすれば、まず土地の餓鬼どもが目をつけるところとなった。そして一と通り探險もすんでしまうと、今度はお医者ごつこの舞台や、喫煙のための隠れがになった。農家の納屋の屋根裏の藁山の上でも、おなじことが行われた。

このほくにしても、かつてはそういう餓鬼の一人だったわけだ。

だから何屋敷だろうといまさら恐れはしないが、足元に生いしげった雑草の葉で半ズボンの脛をくすぐられたり、頭上にさしかかる木の枝や蔓草の莖で顔や腕をひつかかれたりするのをごめんだった。

そこで、きょうばかりは、勇み立つ子供たちを先頭に、そろそろと藪をかきわけて行つた。

目ざす空き家は、敷地の西のどんつまりにあった。その一劃だけが、松林にぽっかりと穴でもあいたようで、九月の午後の日がいつぱいにさしていた。

建物の大半は、大分前に取りこわされた様子で、廊下でつながれた南側の離れのような和室だけがかるうじて残っていた。

ほくは、むきだしの基礎のコンクリートの上に立って廃墟を見まわした。すると、ここが調理場、ここが湯殿、ここが便所というふうに、見取図を頭にえがくことができた。

勝手口のわきの井戸水を汲みあげるポンプの水槽は、ペンキもはげ落ち、赤錆びた鉄板に蔦がからみついていた。

浴室の流しの白いタイルは、初秋の日ざしをまぶしくはねかえしていた。

「ユウレイ、いるか！」

「出てこい、バケモン！」

子供たちが奇声を発して泥足で和室に踏みこんで行くそのあとから、ほくもサンダルばきであがりこんだ。

ここも雨戸、障子、畳はなくなっていた。押入れには襖がなかった。廊下のつきあたりの便所には金隠しがなく、くずれ落ちた壁土で床一面が埋まっていた。

ほくは部屋のまんなかに突っ立って、雨もりでふくれあがった天井や、しみだらけの壁や、

踏み抜かれて地面の草が見える床板などを、ほんやり眺めた。

部屋じゅうに、いろんなものが散らばっていた。ほくら以前にもおおぜいの侵入者がいて、彼らが押入れの中からでもひきずり出したのだ。

やぐら炬燵の枠組、ピンポン台のネット、電熱器、黒とグレーの縞のビーチパラソル、炭取りかご、真空管式のラジオの部品、蓄音機のものとおぼしい朝顔型のラッパ、硯箱。それと、いたるところに蜘蛛の巣と、つもりつもった埃と黴の臭いと。

まるで一個の人間のあられもないミイラでも見るような感じだった。これでもかつてはなかなか風流な趣の、涼しい一室だったにちがいない。

いったい、どこの誰が住んでいたのだろうか？

そのうちに、一冊のぶあつい本が縁側にころがっているのが目にとまった。ほくはしゃがんで手にとってみた。――赤い表紙の、雨風にさらされてすっかり変形してしまった英和辞典だった。ところどころ見出しの単語の下に、ていねいにアンダーラインが引いてある。なんとも古めかしい字引だ。奥付を開いてみると、昭和十何年発行とある。

そのあいだも、子供たちは狼藉の手を休めなかった。押入れの中に首を突っこんで、手あたりしだいの品物をひっぱり出していた。座蒲団や、蚊帳や、ゆかたの包みや、奥の棚に山と積まれた古新聞や古雑誌まで、面白がつて投げとばしてよこした。

ぼくは彼らを制止しながら、ふとその中の雑誌の表紙に目をとめた。『ライフ』とか『ルック』とか『ニューズウィーク』とかいった英文雑誌の一冊だった。その表紙は、うら若いマリリン・モンローの写真だった。

“新屋マリリン・モンロー嬢”

そんな見出しもついていた。本文には彼女のインタビューの記事でも載っているのだろう。ぼくはじつとその写真に見入った。彼女はソファアに慎ましやかに腰をおろして、いくらか半身はんみになって、こつちを見ていた。胸の線を誇示するセーターに、長いタイトスカートをはき、濡れた唇を想像させるようなメーカーキャップをしていた。まだういういしい、どこかおびえたような翳さえある、売り出したばかりのモンローのようだった。

彼女のいる部屋は、ばかにうす暗かった。大きなガラス窓のむこうには、おそらくは曇天の、白い都会の空がひろがっていた。

ぼくは雑誌を拾いあげた。アート紙が湿気を吸って、いやに重たかった。くつついて、うまくはがれないページもあった。めくるたびに白い黴の粉が指先についた。

この部屋の主は、いまごろはとくに結核か何かで死んでいるかもしれない、とぼくは思った。きつと英語好きの勉強家だったのだ。ひょっとすると、かつてぼくがそうだったように、食うや食わずのひもじい戦後の日々に、誰かのお古ふるの英語の辞書をめくる楽しみをおぼえた少

年の一人だったかもしれない。

どこの誰だか知らないが、そのわびしい遺品を前にして、ぼくはちよつとばかり胸がいたんだ。敗戦直後の、アメリカン・イングリッシュが海のかなたからどつと押しよせてきた、あの目まぐるしい解禁の時代の光景がよみがえってくるようだった——英会話と、草野球と、ハリウッド映画のあの時代が。

そして、つぎにやってきたのが、ここには見あたらないテレビだった。白黒の、画面も不安定な、初期のテレビ、つぎつぎと消えて行つた、幼稚で、旧式な番組の数々だった。

いまごろ、ぼくはしきりに東京のテレビ局にいた時期のことを思い出した。道ばたの「粗大ゴミ」の中にくらがっている古いテレビのセットを目にしても、自分が関係した、つまらない番組のあれこれの思い出すのだ。言ってみれば、テレビも、ぼくにとっては過去のものであったから。

ぼくは、KRVテレビに入社した十八年前の四月のことをまだ昨日のここのようにおぼえていた。とりわけ四月十日の初仕事のことによくおぼえていた。へ皇太子殿下御成婚慶祝パレード生中継」というのがそうだった。もつとも、ぼくの仕事は沿道に配置されたテレビカメラのトロッコ押しだった。

新入社員四十何名は前の晩は泊りこみだった。配られた冷たい折詰の弁当を食ってから、地

下二階のリハーサル室のリノリウムの床に貸蒲団を敷いて、全員で雑魚寝した。

ぼくの配置は、皇居から常磐松の東宮仮御所までパレードのコースに十何カ所もうけられた中継地点のうち、三番目の皇居前広場だった。馬車が正門の石橋を渡って、まっすぐこっちへ向ってくる、ちょうどそのつきあたりぐらいの位置だった。カメラとカメラマンをのせたトラックは、三十メートルほどのレールを走るのだ。

定刻の二時半すぎ、大群衆の歓呼と日の丸の小旗の波のなかを馬車がやってくると、合図とともに、ぼくは仲間とトラックを押しにかかった。トラックの動かし方は速すぎても遅すぎてもいけなかった。そのためにいやになるほどリハーサルをやらされたのだ。

馬車はすぐ目の前にさしかかったようだった。歓声の高まり具合でそれはわかったが、むろんぼくらには何も見えやしなかった。

そのとき、一人の少年が近くの人垣から走り出て、馬車に石を投げた。たちまち数人の私服の男が駆けよって、少年をとりおさえた。あつという間の、ちょっとしたハプニングだった。もっとも、これもぼくは自分の目で見ただけではない、あとで録画やフィルムで見て知ったのだ。

皇太子はぼくより一つ年上で、二十五だった。そしてこちらはもちろん独身だったが、べつに羨しいとも思わなかった。石を投げてやろうという気もなかった。ただ、トラックを押しな

がら、ずいぶんひどい職業を選んじまったなと思っただけだ。

あれからもう十八年も経っているのだ。そして、ぼくがテレビ局つとめを切り上げてからも六年になる――

こうやって“幽霊屋敷”のほとりに立っていても、真正面の海からはたえず微風が松林を吹きぬけて、さわやかな、いい気分だった。

しかし、子供たちのほうは“幽霊屋敷”というほどの何の収穫もないのに失望し、腹を立てて、今度はこのくずれかけた空き家そのものを徹底的にぶちこわしかねないきおいだった。

だから、ぼくは早々に引き揚げることにした。

使い古して、うすよれた大道具や小道具、埃だらけの芝生^{グラス}マット、穴があいて綿がはみ出た象や虎やライオンの縫いぐるみ、いかにもうらぶれた感じの人形劇のセット——そんなものでも、テレビのカメラを通すと、電気の魔法ですべてが綺麗に見えた。

道具ばかりじゃない、人間もそうだった。素顔で見ると肌も荒れ、相当^{とう}臺の立った娘役のタレントたちも、ずいぶん年齢をごまかすことができた。おまけに、その時分、テレビはまだカラーではなかった。

ディレクター一年生のぼくは、手はじめに毎朝八時からの子供番組へおはようクマさん〜にアシスタントとしてつけられたが、まずそれで夢をこわされてしまった。あそこで何人か交代で歌ったり踊ったりしている「おねえさん」たちは、テレビの画面で見るほど若くもなければ、美しくもないのだ。彼女たちは、本番が終ればタバコも吸うし、お酒も飲む。べつに子供好きというでもない。いつまでもジャリ——子供のことをぼくらはそう呼んでいた——の相手をしているつもりはなく、ただつぎの仕事への足がかりとしてやっているだけらしい。そういう

女優志願の卵や、ほかに使いみちのないタレントたちのたまり場らしいのだ。

その「おねえさん」たちが猫なで声で「おうた」を歌ったり、「お絵かき」の相手をしたり、ジューパンのみごとなお尻を見せつけてグラスマットの上をごろごろころがったりするのを見ているのは、仕事とはいえ、はなはだ憂鬱だった。ほくはまだ独身だったし、ジャリにも興味は持てなかった。

そんなわけで、へおはようクマさん」に新人の瀬尾クニ子が登場した時は、ほくもいつになくそわそわした。ほくばかりじゃなかったろう。新顔の若い女性タレントと仕事をするととなると、カメラマンも裏方も急に調子づいたりするものなのだ。

その朝——五月の初めだった——スタジオにやってきたクニ子は、とにかく新鮮だった。彼女は丸い襟のワイシャツ型の白いブラウスに、ぎよっとするような真つ赤なキュロット・スカートをはいていた。もつとも、それはたいていの「おねえさん」たちが一度はしてみせる服装だったが、髪をみじかく切ったクニ子には実にびったりだった。ほくは彼女から目をはなさなかった。

彼女は簡単なテレビ化粧もしていた。ドーランを塗った部分と地肌の部分とがはっきりわかる顎の下あたりを見ていると、扮装した可愛いぶち猫という感じで、それがまた女子学生のような健康で清潔な雰囲気をもたらした。事実、クニ子はまだどこかの私立の女子大に籍があ

るという話だった。

ほくは一目で彼女に恋を感じたようだった。だが、どうやら外見にたぶらかされたらしい。

「瀬尾君だ」

チーフの朝倉がほくらに紹介すると、クニ子はえらく無愛想に、ほそつと言ったものだ。

「瀬尾です」

それっきりで、「はじめまして」とも「よろしく」とも言わなかった。どう見てもあまり感じのいい態度じゃなかった。「こんな番組、気がすまないんだけど」というように悪ずれたタレントがよくやる不貞くされたポーズみたいだった。

一と目ぼれたはずのほくは、五分後にはもうむかむかしていた——駆け出しのくせに、いやにつんつんした、不愉快な女だ。

打合せやカメラリハーサルのあいだは、それでもまだよかった。フロア担当のほくがくどくどと念を押すたびに、クニ子は「はい」とか「ええ」とか、めんどくさそうに答えていたが、しまいには「わかってるわよ、そんなこと」と言わんばかりに返事もなくなった。

それならそれでもいいや、とほくは思ったのだ。彼女はいままでも、あちこちの番組に、よい役ぐらいでは出ているらしいから、たぶんよくわかってるんだろう、だったら任せておいて好きなようにやらせればいい。

ところが、いざ本番に入ってみると、それどころじゃなかった。

クニ子のはのつけから台詞をどちり、カメラに向つてペロを出したものだ。傍若無人と言えはいえるが、オーディションじゃあるまいし、およそプロのタレントとしてはあるまじきことではないか。おまけに彼女の舌はモニターの画面にうつたら、おそろしく長く見えた。

「しょうがねえなあ」

早くも調整室にいる朝倉が舌打ちするのがインターカムから聞えてきた。この辺からもうしくは悪い予感がしていた。

ほくはといえば、恰好だけは一人前にインターカムを耳につけ、台本とストップウォッチを片手に右へ走ったり左へ走ったりしていた。——タレントにキューを送る、——時間に慣れない相手には場面ごとに“あと一分”“あと三〇秒”などとマジックで大書したカードを見せる、——そのほかにも上から指示があればそのつどすばやく紙に書いてタレントにこっそり見せる、——その合間にはカメラのケーブルをひっぱったり裏方が道具を出し入れするのに手を貸したり——というふうで、まるで物置小屋の鼠みたいに埃だらけになって走りまわっているのだ。

それで何かミスが出れば、まず怒鳴りつけられるのはこのほくだった。

「もたもたするな、大石！ もっと早くキューを出せ！」